

第4回看護研究会 (管理者研修会)

- 日 時 令和6年12月10日(火) 10:00~15:25
- 出席者 52病院 179名、委員14名 (うち会場68名、委員13名)
- 開催方法 ハイブリッド開催 (会場：岡山県医師会館 三木記念ホール)

講演 いま、あらためて「看護の本質」の伝承を!

講師 北海道医療大学 石垣 靖子 名誉教授



基礎教育は重要で専門職としての基礎をつくり、理想あるいはロマンのない教育は真の教育ではない。看護教育における人間形成は、医学教育の場合と同様にあるいはそれ以上に、学生一人ひとりが病める人に直接ふれ、感じ、教えられることによって達成されるものである。看護を正三角形にたとえると、技、知の二辺を底辺の態度(愛)が支える形である。態度は人間性・ケアに向かうその人の姿勢であり、三角形の底辺を広げることで全体の成長につながる。底辺を広げることなく、知と技にとらわれてしまうと、人間味のない、看護の心のないものになってしまう。看護師としての自分の基礎を育てることは上限のない挑戦である。

従来の治療中心の医療から、患者の生活重視型の医療へ転換が求められている。多くの高齢者は多少の障害があっても地域で生活しているが看護の大半は病院勤務

であり、地域で働く看護師は6%に過ぎない。地域の保健・医療・ケアを担う看護職の増加が大きな課題である。

よりよい看護管理者になるために、何よりもかけがえない自分の人生を生きるために「自分を愛おしむこと」「自分をよい状態にする習慣」「その術(すべ)を身につけること」を念頭においておきたい。

今後、医療の進歩と看護の役割拡大、高度の専門性を身につけた看護師の増加は患者にとっては大きな希望となる。超高齢社会を迎え、高齢患者が増加する中、医療のフロントランナーとしての看護師は、患者がどのような状態であってもその人らしさが尊重され、人間としての自由が保障される医療・ケアの定着に挑戦を続けたいものである。

(看護研究委員 三宅尚美)

講演 コーチングマインドが、マネジメントをもっと楽しくする

講師 オフィスKATSUHARA 勝原 裕美子 代表



私たちは、他人の思考や行動と自分を比較して、他人を自分の基準で評価/判断するのが得意だがマイナス感情になりやすい。コーチング的に関わるとは、相手の関心に関心を寄せることが重要。そのためには、判断軸を自分に当てず、何も知らない状態で画用紙に絵を描くように具体的に聴き、目を見たり、頷いたり相手が見えている世界と一緒に見ようとするのが大切。自分の認知を変えていくためには、相手を変えようとするのではなく、自分の物の見方を変えてみる。その人の視点から世界を見ることを通じて、その人の立場を理解できたときに「共感」が生まれる。医療現場では命に直結していることから、問題が起こると直ぐに答えを示す(ティーチング)ケースが多い。しっかりと時間をかけてコーチングを活用して振り返りを行うことで、自分で考え、気づき具体的な行動に落とし込むことができ

ようになる。看護現場において看護管理者がコーチングを活用することでチームのコミュニケーションが向上し、効果的な患者ケアを提供することにもつながる。

コーチングを活用するためには、「幸せの3原則と共同体感覚」1. 自己受容：自分が好きだと思えて、自分にOKを出せる状態 2. 他者信頼：他者は仲間である。だから、他者を信じる 3. 他者理解：私は役に立っている。共同体に貢献している。まずは自分を受け止め、横のコミュニケーションを大切にすることを念頭に置いておく。これらのコーチングの理念や手法を理解し、実践できるように現場教育も必要となるが、まずは、学んだコーチングスキルを看護管理者が意識して活用していくことが第一歩。

(看護研究委員 窪田京子)